



私は沖縄戦について学ぶために、7月25日から7月28日まで、平和都市友好交流事業に参加し、友好都市である沖縄県糸満市を訪問しました。本当は、昨年度に派遣予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により中止となりました。そのことをきっかけに私は沖縄戦について本で学びました。ですが、実際に現地で話を聞くと想像をはるかに超える悲惨なものでした。

当時私と同じぐらいの年齢だったひめゆり学徒隊の証言の中には、負傷した日本兵が麻酔のない状態で手術を行われるため、暴れる体を無理やり押さええたり、切断される手足の処理などを毎日のようにやっていたというものがありました。

また、ガマにいた学徒隊の人たちは日系人に「デテキナサイ、デテキナサイ」と呼びかけられても誰も出ていかず、ガス入りの爆弾を投げ込まれ、大勢の人が犠牲になりました。その場所に建てられたのがひめゆりの塔で、たくさんの千羽鶴があり平和を願うものだと感じました。

一番印象に残っているのは沖縄戦の語り部をされている久保田 暁さんがお話してくれたことでした。当時生後3ヶ月だった久保田さんは母親に抱かれ、背中におぶられていたお兄さんは爆弾の破片により命を失ってしまったそうです。なかでも、恐ろしいと思ったのはガマに入れたとしても、子どもの鳴き声でアメリカ軍に気づかれてしまうため、子どもの口を手で押さえ子どもを殺してしまうことがあったということです。そんな状況にまで追い込まれてしまった人たちのことを考えると心が苦しくなります。

さらに怖いと思ったのが集団自決です。逃げ場のない絶望感、死ぬのが当然、死なないのは申し訳ないといういろいろな想いから自ら命を絶つ人がたくさんいたそうです。一方で、手榴弾を持っておらず、自決をたくてもできなかった、持っていたらすぐに死んでいたという証言もありました。死んだほうが楽と思ってしまうほど戦争は苦しくてつらいものなのだと強く感じました。多くの人が犠牲になり、誰も幸せにならない戦争は二度と繰り返してはいけないと思いました。

久保田さんは「不発弾を撤去するのに100年はかかる。全て撤去するまで戦争は終わらない。」とおっしゃっていました。私はこの言葉に他人事ではないと感じさせられ、沖縄戦のことを忘れてはいけないと思いました。

この網走でも戦争により多くの犠牲者や悲しい思いをしている人がいると思います。今では実際に戦争を体験した人が少なくなっていますが戦争の恐ろしさを忘れないために私たちが次の世代に伝えていく必要があると思います。

今ウクライナでは戦争で苦しみ不安な日々が続いていますが、日本では平和に暮らせています。それは当たり前ではないということはこの4日間で改めて経験しました。

最後に、糸満市や厚木市の中学生と行ったおきなわワールドや琉球ガラス村は本当に楽しかったです。北海道では感じることでできないものを感じることができ、とても良い思い出になりました。このような機会を与えてくださりありがとうございました。